



震災復興スタディーツアー



10月1日(木)に1~3年生25名の生徒と教員4名で震災復興スタディーツアーを行いました。
東日本大震災・原子力災害伝承館や、広野町熱帯フルーツミュージアム、Jヴィレッジを訪れました。

東日本大震災・原子力災害伝承館



双葉町は今年3月に町の面積の5%にあたる北東部とJRの駅周辺で原発事故による避難指示が解除され、東日本大震災・原子力災害伝承館は震災の記憶の風化防止のための情報発信と防災・減災に役立てるためオープンされました。

伝承館へ向かう途中に通った大熊町では、通行許可証がないと通れない道や、頻繁に行き交うトラック、バリケードで封鎖され草木が生い茂った誰も住んでいない家々などを目の当たりにし、生徒たちは言葉が出ない様子でした。

伝承館では自由見学をしたあと、語り部の方のお話をお聞きしました。「正しい情報の大切さ」や「町を創るのも人・崩壊させるのも人・崩壊した町を創りなおすのも人」という言葉が印象的でした。

最後に「まちづくりなみえ」の方にバスに同乗していただき、震災当時や現在の町の様子について説明していただきながら浪江町と双葉町をめぐるフィールドワークを行いました。これらの地域は原発事故の影響で未だ広範囲が帰還困難区域となっています。請戸小学校震災遺構や大平山霊園の慰霊碑、震災当時のまま止まった時計、一階部分が潰れて震災当時のままになっている家々など、テレビや新聞の報道だけではわからない町の様子を生で見聞きし、突然大切な故郷を離れなければならなくなった方々の気持ちを想像すると、ただただ胸が締めつけられる思いでした。

町は時が止まったままの場所もありましたが、確実に一步一步復興に向けて進んでいることも明らかでした。作付けや新しいお店が始まっていたり、人も少しずつ戻ってきたりしているところもあります。まちづくりなみえの方の「私たちは正解がわからないことへ挑戦していく」という言葉から、被災した方々の苦悩と希望を感じました。

広野町熱帯フルーツミュージアム

広野町熱帯フルーツミュージアムでは、東日本大震災及び原発事故で被害を受けた農業と観光の再生に向け、町の新たな特産品として国産バナナの栽培に取り組んでいます。熱帯性の作物を東北で栽培、収穫するというチャレンジ精神が町民の方々への希望の糧となり、実った黄色いバナナが少しでも「心の傷」を癒やすことができればという思いで取り組んでいるそうです。バナナだけでなくパイナップルやパパイヤ、コーヒー豆の栽培にも挑戦していました。



とても大きいバナナの葉



バナナはこんな風になるのですね!



Jヴィレッジ

Jヴィレッジは原発事故後、応急対応や廃炉作業の拠点となっていましたが、昨年4月20日に全面再開しました。東京五輪の聖火リレーの出発地にも決まっており、復興の象徴の一つとなっています。

この日は天然芝のピッチに入らせていただき、サッカーやバドミントンなど運動をさせていただきました。コロナ禍で運動不足になっている中、良質な芝の上でとても貴重な経験をさせていただきました。



同じ福島県内でも少し車を走らせると違う世界が広がっていました。10年経ってもなお

震災当時のままの風景が残っているところがあります。震災や原発事故の事実・現状・取り組みを知り、今後復興や防災のためにどんなことができるのか考え行動していくことが必要だと感じました。

ぜひ日本各地のみなさん、更には世界各国のみなさんにも来ていただいて日本で起きたこと、自分にも起こるかもしれない災害のことについて考えてほしいと思います。

福島を知り、日本を知り、世界を知る。今後も国際科学科としてできることに一生懸命取り組んでいきます。